



庄内町（旧立川町）風力発電小史

庄内地域史研究所 会員 三原 容子氏（酒田市）

「庄内地域史研究所」の表札を掲げて10年、庄内地域の近現代史のあれこれを欲張って調べてきた。庄内郷土史研究会40周年に向けて「庄内」ではなく「庄内町」について一文を書こうと考えた時、「鳥海山沖洋上風力発電を考える会」の共同代表を務めていることもあって、風による町おこしを取り上げることにした。

立川町が合併で庄内町になったのは2005年、風力発電で有名になったきっかけは、2002年2月19日放映のNHK「プロジェクトX」である。その内容については現在NHK出版の『プロジェクトX挑戦者たち13』（2002年）で確認することができる。

プロジェクトXでは話が1980年から始まる。悪風「清川だし」に苦しめられてきた町で風を利用しようというプロジェクトが始まった。風車を野菜や花の温室栽培の熱源に利用しようとしたのである。戦前から特に北海道で普及していた「山田式（山田基博製作による）風車」を導入してみたがあっけなく吹き飛ばされた。ついで1981年に科学技術庁とNEDOからモデル事業の話が持ち込まれて、国産風車（5kW×2基）での実験が始まった。これも間もなく吹き飛ばされ、日本で風力発電は難しいという結論になった。

1988年「ふるさと創生事業」で各市町村に1億円が交付された時、日本風力エネルギー協会で紹介された風力発電研究者に相談し、関係者の尽力で、米国製風車（100kW×3基、既に撤去）を輸入し、かつ余剰電力を電力会社に売電するところまでこぎつけた。1993年「風車村」に完成し、それ以降、全国「風」サミットを開催し、「風力発電推進市町村全国協議会」が結成され、さらに水田の中に6基を建設し（デンマーク製400kW×2, 600kW×4基、撤去済み）、風車村に風力関連施設「ウィンドーム立川」がオープン、本格的な発電事業を行う町となった。1997年頃、全国からの視察団が年間5万人もあったそうである。

21世紀に入ってからでも建設が進んだが、風車の寿命はわずか20年なので撤去も相次いだ。現在では水田の中に、日立製作所と安藤組のどちらもドイツ製風車（1,990kW）が1基ずつ、合計2基が立ち、狩川から清川の南側に連なる標高百数十mの山々の尾根に、北から大堰台（安藤組）、座頭塚（大商金山牧場）、鶴ヶ峰（加藤総業）と、ドイツ製風車（1,870kW）が4基ずつ、合計12基が建てられている。

風力発電は羽根（ブレード）が大きければ大きいほど効率が良いため、年々巨大化している。100kW時代は高さが30m台だったが、水田に6基建設された時代にはその倍となり、現在では100mを超え、尾根に立ち並ぶ風車は131mである（遊佐町や酒田市沖の洋上風力計画は300m近い！）。巨大化と共に騒音被害も増大している。100kW風車でさえ、約600m離れた立川町長宅で風車音が聞こえたという（丹省一「館林茂樹（元山形県立川町長）を偲んで」Journal of JEWA 2013年）。20年後に同じ場所に建て替える事例も少なくないが、水田の中の風車が完全撤去されたのも、近隣への迷惑があったかららしい。

2024年7月庄内地方を襲った大雨によって風車が立ち並ぶ山の林道がえぐられて埋設してあったケーブルがむき出しになり、建設後3年で運転が停止された。まだ再開の報を聞かない（令和6年12月初め現在）。全国的に風車建設による環境破壊が指摘されているが、庄内町でも航空写真で見ると痛々しい姿になっている。

健康被害と環境破壊という二大問題について、改めて考える必要があるだろう。国では、陸上風力から着床式洋上風力へ、さらに浮体式洋上風力へと政策を変更してきている。風車村の風車が撤去された跡地はブルーベリー畑になり、ウィンドーム立川では現在閑古鳥が鳴いている。「プロジェクトX」時代に関わった方々にとっては寂しいだろうが、一つの時代が終わったということなのだろう。

